

日本とは何か。

—— 倭国の過去と現在そして将来について ——

蓮 沼 啓 介

1. 伊勢大神の女神性

明治二年三月に行われた天皇による伊勢神宮の参拝は全くの新規の試みであった。⁽¹⁾

そもそも天皇や皇統と伊勢神宮とはどんな関係にあるのだろうか。

天皇と伊勢神宮の不思議な関係について記紀の記事を確かめよう。

垂仁紀二十五年三月条に倭姫命が天照大神の祭祀を引き受け、鎮座の場所を探す物語がある。崇神紀六年条には天照大神と倭大国魂神とを一緒に「大殿」宮中に祭ったところ、神々の勢力が強過ぎるために、天照大神を豊鍬入姫に倭の笠縫に祀らせたという物語がある。天空神であり外部からの渡来神である天照大神と地上神であり土着神である倭国魂神との折り合いが悪く神々の勢力争いが熾烈なので、天照大神の祭祀を宮中から遠ざけて笠縫の村に定めたという次第である。だが天照大神の祭祀は豊鍬入姫にも負担が大きすぎて、仕方なく、倭姫命が倭の国の外に連れ出すことにした訳である。結局大神が自ら伊勢を選んで鎮座の場所は決定した。このいき

さつについて古事記は沈黙を保っている。崇神記によれば大物主神の祟りが恐ろしかったから語り部たちは恐れおののき神々の争いを物語ることにためらいを感じ憚ったのであろうか。

神々の争いのとばっちりを恐れて護身のために形代としての鏡と剣が特注されたという伝えも古語拾遺にある。崇神朝に「天照大神及草薙剣」を倭の笠縫の邑に遷して豊鍬入姫に斎ひ奉らせたとあるが、ここで「天照大神」とあるのは八咫鏡のことである。神々の争いを恐れて八咫の鏡と草薙の剣を宮中から笠縫へ遷したのであるが、その際に形代となる鏡と剣をわざわざ新鑄させている。践祚の儀式に用いられる二種の神器である鏡と剣は「護身御璽」神々の威力をかわす靈力を備えた宝器なのである。

朝廷と伊勢神宮の関係についてははっきりしないことが多い。皇族と伊勢神宮の関係は深い。長くいつきのみや⁽²⁾斎宮が置かれていた。

天ツ皇らの神と斎宮との神婚の儀式が執り行われた。天ツ皇らの神は男神と見なされていたに違いない。

北朝の皇族たちは斎王を立てなかった。代わりに

(1) 2017年11月11日に開催された全国邪馬台国連絡協議会の第6回東京大会において行われた足立倫行報告による。

(2) 榎村寛之2004『伊勢斎宮と斎王』塙書房参照。

八尺瓊の勾玉を祭った。後嵯峨帝の時代と推定される。⁽³⁾

天照大神はひょっとすると男神ではないか。常識に照らしても外宮の豊受大神が女神であることは明らかであるし、神々は陰陽ふた柱が対になって祀ら

れることが多いから、内宮の伊勢大神の方は男神ではないかという類推と疑問が広がることになる。

宝賀寿男はコラムの中で伊勢の大神が男性神ではないかという疑いが生じる理由を手ぎわ良く並べている。⁽⁴⁾ 疑いは五点ある。

- (3) 前掲、足立倫行報告による。『百練抄』仁治三年正月条に「三種宝物」と見えるが、上田正昭2012『私の古代日本史(下)』新潮社によれば、これがレガリアを「三種の宝物(剣・鏡・玉)」とする初出の記事である。同77頁。

もともと養老公式令にいう「天子神璽」とは天皇御璽のことである。令の本注に「謂踐祚之日寿璽」とある。踐祚の儀式の際に中臣の寿詞が奏じられる時に御璽の引き継ぎが行われる。本注の続きには「寶而不用」とある。普段は宝蔵して印章として用いる事はない。この御璽は平家一門に属する二位の尼こと平時子が入水した折りに壇ノ浦の海中に沈んだまま未だに回収されていない。空き箱が浮き上がったので源氏が空の箱を回収したと伝わる。御璽の材質が玉であるという記録が誤解されて玉が入っていたと考えた挙げ句、後嵯峨天皇の即位の際に八尺瓊の勾玉を御璽の代わりに神器に加えた訳である。宮中に保管された古い勾玉を八尺瓊の勾玉と認定したものであろう。この形代を後醍醐天皇が造作したため、どちらの勾玉が本物か不明の事態が発生して、今日に至っている。もともとレガリアともいう王権継承の証拠に勾玉は含まれていないので、どちらも本物のレガリアではありえない。八尺瓊の勾玉は禁裏御所の正統な相続人が誰であるかを判定する新しい宝器である。従って南北朝正閏論とは禁裏御所の主が誰であるかを巡る議論であり、王権の行方とは無関係の議論である。

議論の混乱は伴信友の「神璽三弁」(同全集第二巻)に遡る。伴信友は律疏の八唐の六大不敬の科条に見える「偽造神璽内印」の注に「神璽者、謂依令踐祚之日中臣奏天神之寿詞忌部上神璽之鏡剣」とあるところを明法家の失考であり誤解であると咎めているが、これは中臣の寿詞を奏する際に御璽の引き継ぎが行われるという慣例を全く見損なったために発生した伴信友の「失誤」である。小中村清矩が神璽とは八尺瓊の勾玉のことであるという誤解を広めてしまい、黛弘道も「三種の神器について」ではこうした誤解を再生産している始末である。同1982『律令国家成立史の研究』吉川弘文館、参照。

伊勢貞丈が『安斎隨筆』巻二「三種神器」において「神璽の事。貞丈按に天子の御印なるべし。・・・孝徳天皇以来の物にてあるべし」と考証を加えているが、持統紀に「奏上神璽剣鏡於皇后」とある通り、天武帝が造った天皇御璽を「神璽」と呼んで引き継いでいることが分かる。孝徳紀に「天皇授璽綬」と見えるが、これは伴信友も言うが如く、書紀の編者が加えた潤飾の文である。持統女帝が受け継いだ天皇御璽が安徳天皇もろとも壇ノ浦の海中へ沈んでしまったわけである。しばらくは回収した空箱を神璽の代わりに拝んでいたが、空箱では体裁が悪いし具合も悪いので後嵯峨天皇の即位の際に新たに八尺瓊の勾玉を宝器に加えた。これが歴史の事実である。

- (4) 宝賀寿男2006『神武東征』の原像 青垣出版。179～183頁。

第一は陰陽五行説による疑問である。日本書紀の冒頭は陰陽二元論で始まり、神々が陰と陽に振り分けられている。こうした振り分けに従えば、太陽神である天照大神は男神に分類され、月の神である月読尊が陰神であり女神に分類される筈である。

第二は巫女が奉じ祀る神に関する疑問である。巫女それも未婚の皇女が奉える神であれば男性神として表象される筈である。また天照大神の古名である大日靈貴の「靈」は巫女の意味であり、太陽神の婦神ないし妻神であった筈である。

第三は古伝による疑問である。江戸初期の伊勢外宮の神官であった度会延経^{ノブツネ}は大江匡房の著わした『江家次第』に天照大神のご装束一式について説明がある箇所を見て男帝の装束であると判断した上で「之ヲ見レバ、天照大神ハ実ハ男神ナルコト明ラカナリ」と結んでいる。また伊勢神宮の内宮の本殿の真下には高さ1メートルほどの「心の御柱」(天の御柱)があるという。この御柱を立てる秘儀は夜半に篝火を焚いて土地の娘たちにより神饗として行われるというが、この御柱は明らかに男性の象徴である。

第四は種族論による疑問である。天皇家の先祖と推定される天孫族は北方系の扶余系ツングース族の一派であろうから、その系譜を辿ると始祖は必ず男性であって女性を始祖にあげる部族は皆無である。また新撰姓氏録にも女性を始祖にあげる氏族は皆無である。更に北方に多い日光による受胎神話を見ても太陽神が男神であることに疑いの余地はない。

第五の疑問は天照という神名にかかるものである。『延喜式』の神名帳を見ると天照御魂神など天照を神名の一部とする神の名が見られるが、すべて男神である。『三大実録』に天照高日女神というただ一つの例外が見られるが、天照高日女神は天日矛の妻神である高日女を指すので正確に言えば天照という神名を含んでいない。

宝賀寿男の疑いは尤もである。だが鏡がある。ご神体である八咫の鏡は女神の依りしろなのではあるまいか。銅剣と銅鏡は男女陰陽に対応する宝器なのではなかろうか。剣が武人王の権威を示すのに対し鏡は巫女王の権威を示す宝器ではあるまいか。剣は男子の象徴であり鏡は女人の象徴ではなかろうか。

もともと踐祚の儀に用いられた宝器は鏡と剣の二種であり、うち鏡が女神性を示し剣が男神性を示すという組み合わせであった筈である。⁽⁵⁾

天照大神が女神であるという結論は宝賀寿男の疑念にも拘らずどうやら動かなそうである。

2. 倭国東遷説の点検

銅鏡と銅剣は皇位の継承儀式に用いられる宝器である。日本書紀の記事を確認しよう。「鏡剣」にまつわる記事は継体紀と宣化紀と持統紀にしか見えない。継体紀元年二月条に「大伴金村大連、乃跪上天子鏡剣璽符再拜」とある。また宣化紀即位前紀条に「群臣奏上剣鏡於武小広国押植尊」とある。また持統紀四年正月条には「奏上神璽剣鏡於皇后」と見える。

天孫降臨の神話の本文には鏡剣に関する記事がない。

鏡剣に関する記事は第一の一書に見えるだけである。

2-1 神武東征説

二つの文化圏があった。銅剣や銅鏡また銅鉾の出土する上古の遺跡は北部九州に片寄っている。これとは対照的に銅鐸の出土する地域は畿内や出雲に片寄っている。銅剣・銅鉾と銅鐸の出土地の分布は鮮やかな対照を示す。

謎がある。どうして銅鐸が出土する地に都城を有する大和王権の祭器が銅鏡と銅剣なのか。答えがある。これは大和平定の明かしである。

鏡剣文化の東遷がかって行われたのではないかという疑問が湧き起こる。

早くは和辻哲郎が『日本古代文化』において「近畿中心の銅鐸の文化」と「筑紫中心の銅鉾銅剣の文化」の対立を認め、どちらが優勢であったのかを問い、九州が近畿を「東征」した結果であるという見通しを示した。

和辻哲郎は東征の時期を2世紀半ばとする。魏志にいう倭国大乱の時期である。和辻哲郎は那珂通世や内藤湖南に従い、崇神崩年の戊寅年を西暦の258年と推断して卑弥呼の時代と崇神・垂仁の時代が同

(5) 宝賀寿男の疑問に対する当面の解答を以下に記す。

疑問の一について。太陽神が女神であり月神が男神であるところに倭国の独自性があるのだから、何ら問題はない。

疑問の二について。天ツ皇らの神と斎王の神婚の儀式が行われる以上は天ツ皇らの神がをとこ神と把握され認識されていたことに疑いはない。歴代の天皇の霊を纏めて一体に捉えて神格とすればそれはをとこ神と位置づけられて当たり前である。だからといって皇統の祖神である天照大神までもがをとこ神になる訳ではない。

また大日靈貴が天照大神に変身したところに記紀神話の醍醐味があるのだから、ヒルメが太陽神の妻であるからといって、変身後の天照大神までもが太陽神の妻に位置づけられるわけではない。

疑問の三について。異形の天照が童子神の姿や形をとって出現したとしても、天照大神の女神性が失われることにはならない^(a)。度会延経は天照大神の装束が男帝のものであり、神功皇后の装束が女后のものであることを確認しているだけであって、女帝が男装することを考慮に加えていない結果、天照大神は男神であるという結論に一足飛びに跳び付いている訳である^(b)。心の御柱が男性の象徴であるとしても、どの神に属するものであるのかは分明ではない。あるいは猿田彦神の七咫^(c)と伝える長い鼻の象徴であるのかも知れない。

(a) 佐藤弘夫2000『アマテラスの変貌』法蔵館。

(b) 度会延経『内宮男体考証』（内閣文庫本に拠る）。

(c) 『古語拾遺』天孫降臨の段、参照。

疑問の四について。天孫族とは神話伝説に登場する部族であってそのまま歴史の事実ではない。新撰姓氏録が編纂された平安時代には日本の親族構造は父系の血統に定まっていたので、女系の血統は親族とは認定されなかっただけのことである。奈良時代以前の上代日本の親族構造は双系制であったと推計される。

疑問の五について。天照大神の祭儀は朝廷と伊勢神宮が独占していたので、天照を神名の一部に持つ女神を祀ることは一般の寺社には禁ぜられたことであった。出石神社の様に祭神を天日矛に変更して太陽神の祭儀を続けた（と推定される）神社もあった位である。

時代であると推論を進める。こうした時代診断に立つと、神武東征は卑弥呼の時代よりも七十年ほど前と推算されることになる。だが崇神崩年の戊寅年を干支の一周期に当たる60年のちの318年に比定すると事態は一変する。卑弥呼が魏に遣いを送った景初三年に当る西暦の239年の時分に畿内を統治した勢力について一切は不明になってしまうのである。

こうした不明の時代に大きく切り込んだのは安本美典である。安本は天皇王朝の前に饒速日の王朝があったことを主張し、先代旧事本紀の一部の記事をその根拠に挙げる。更に三河や遠江に出土する三遠式銅鐸の分布と庄内式土器の畿内に於ける分布が物部氏の勢力圏に重なるという興味深い事実を提出する。⁽⁶⁾

末期の銅鐸である三遠式銅鐸が安本のいうように物部氏により制作されたとすれば、物部氏の畿内進出は銅剣銅鉾の文化と銅鐸の文化がなお対立していた段階に起きたことが明らかになるし、鏡剣文化による東征が生じる以前の出来事ともなる。とすれば、邪馬台国はなお九州にあったと考えるの外はない。魏志倭人伝に銅鐸に関する記事がまったくないことは明白であるからである。

こうして九州にあった邪馬台国が畿内に東遷したという邪馬台国東遷説が登場する。神武東征の伝説は邪馬台国の東遷を基に成立した物語である。これが邪馬台国東遷説である。⁽⁷⁾

邪馬台国東遷説に潜む内在的な困難を明るみに出すために新説を提出しよう。

2-2 倭国東遷説

倭国東遷説をここで新たに披瀝したい。倭国は三度東遷した。

まず ① 奴国が東遷した。西暦で184年頃の出来事である。

奴国は伊都国との主導権争いに破れ、奴国の王族たちは宮処落ちを迫られ、北部九州を離れ、東征の旅に向かったと推計される。

東征の経路については高城修三の復元が参考になる。『神武東征』134頁に掲げる図4-3を見ると遠賀川の河口にあった岡の^{みなと}水門から安芸の埃宮と吉備の高島宮を経て河内湖の辺りにあった日下邑に進むルートが書き込まれている。ここでは神武の実在のモデルは奴国の王族たちであるからその亡命路の記録と読み替えることができる。奴国の王族たちはここから生駒越えを試み磐船神社の傍を抜けて鳥見に進んだと推定される。後にこの体験は天神本紀や天孫本紀に素材として採用され、饒速日命を先頭に神々が天の磐船に乗って天空を駆け抜け、やがて生駒の峯に降り立つという物語に発展する。

奴国が敗北して王族が逃亡したと解する根拠を示して置く。魏志倭人伝を見ると奴国には「咒馬觚」という官職が置かれている。奴国には「爾支⁽⁸⁾」という国王はいない。代わりに「咒馬觚」という官吏がいる。この官吏は伊都国の副官である「泄模觚」や「柄渠觚」と並ぶ下僚であろうと推算される。つまり奴国は国王を持たず伊都国の国王である「爾支」の派遣する官吏に支配される状態にあったことが判明する。奴国は伊都国の軍事占領の下に置かれていた。

(6) 『古代物部氏と「先代旧事本紀」の謎』勉誠出版、2003。なお先代旧事本紀の成立事情については連沼啓介2006「天孫本紀の史料価値」神戸法学雑誌56巻2号も参照されたい。

(7) 安本美典1981『研究史 邪馬台国の東遷』新人物往来社および荒木博之・奥野正男編1994『邪馬台国は東遷したか』三一書房参照。

(8) 「天邇岐志国邇岐志」(古事記)にいう「邇岐」である。国王という意味であろうが、語源はにきたえのニキであろうか。平安をもたらす者という意味の言葉であろう。饒速日とは奴国の国王であったハヤヒのことで、語り部が語り継ぐうちにニキがニギに意味を変化させ濁音に変わったものであろう。ニギはにぎやかやにぎわいと語幹を同じくし、国を豊かにするとか富みを増やすとか国を治めるといった意味を持つのかも知れないが、詳細は不明である。因にニギルは獲物や宝石などの財貨を手中に納めるという意味の動詞であろう。ともあれ天孫である「邇邇藝命」は天空と地上の両界を統治し支配する王者なのである。ニヒニキとは新王のことである。

次に ② 伊都国が東遷した。西暦で260年頃の出来事である。

伊都国東遷の理由は二つあったと推察される。一は狗奴国の脅威である。狗奴国は強大化を続け、再度の敗北の危険は著しかった。また魏の動向が不安材料であった。魏の命運は既に尽きたも同然であり、司馬氏による王権の篡奪は時間の問題であった。魏の王族である曹氏への友誼や情誼は司馬氏への不信に直結する。迫り来る二つの脅威にどう立ち向かえばいいのか。この難問への答えが畿内への遷都であった。倭国の本拠を列島の中心部に移す。飯豊姫の決断の賜物である。

遷都に先立ち、フトニ王は畿内東征に向かい、在地勢力の抵抗に出会いそれを打ち払っている。五瀬命の負傷と敗死はこの時の出来事を素材とする物語である。フトニ王は紀ノ川を遡行するという迂回路を選んだ模様である。背後から挟み撃ちにする算段であった。だが饒速日命の子孫である物部氏は争いを避けフトニ王に服属する道を択び伊都国の王族に纏向を明け渡す。こうして纏向遷都が開始される運びとなる。

伊都国から纏向に遷都が実行されたという学説の根拠を点検して置こう。

まず伊都国の人口が激減したという事実が認められる。魏略には伊都国の人口は「戸万余」とある。ところが『魏志』には「有千余戸」とあって伊都国の戸数が激減していることが窺える。なぜ戸数が激減したのであろうか。これは人口が大量に外部に流出したからである。人々がどこかに向かった。その行き先はどこであるか。魏志の記事からは知る手掛かりは見当たらない。だが答えは明白である。人々は纏向に向かったのである。纏向遺跡の規模が急速に拡大する⁽⁹⁾という事実が確かめられている。自然の人口増ではとても説明できない急激な人口増加が生じたことは確実である。どこからか大量の人口が

急に纏向にやってきたに違いない。それはどこからか。伊都国からである。ほかに考えにくい。

また別の根拠もある。倭人伝によれば投馬国から「水行十日陸行一月」で邪馬壹国に至るという旅程記事がある。うち「陸行一月」の部分が難読の箇所であった。投馬国を鞆の浦の古名である苦の浦と読んで吉備の国と解すると、「水行十日」の箇所は舟旅であれば十日で難波津に到着すると解することができるが、別路と解しても吉備の国から難波や大和までは陸路を歩いても十五日くらいの道のりであって、一月もかかるのは不可解であった。だが大規模な遷都であって見れば、通常の旅行とは違う家財道具を運んでの引っ越しになるので、日数も倍くらいかかってそこにも不思議なことはない。馬や大八車の如き台車に乗せて荷物を運ぶ旅であれば、途中で休息や宿泊また野営も必要となり、日数もかかるというものである。

こうしてみれば伊都国から纏向へ遷都が実行されたことは確実である。

更に ③ 不弥國が東遷した。西暦で366年の出来事である。

不弥国は奴国の王族と伊都国の王族が東遷した後北部九州において勢力を伸ばした新興の勢力である。オキナガタラシヒメの時代に、まず新羅占領を企てたが、草人形に欺かれて敗退している。熊襲出身と覚しい武人であるヒメの夫はこの戦いで負傷し敗死している。甲子の歳である西暦の364年の出来事である。続いて畿内の平定を企てオシロワケを中心に東征軍を派遣して、紀ノ川を遡上して大和に侵攻している。丙寅の歳である366年の出来事である。宇治川の合戦で武内宿禰が「数万の衆」を率いたとあるが、これは壬申の内乱の体験を再現した描写である。オシロワケも神倭磐余彦の實在のモデルの一人である。

東遷は三度実行された。この三度の東遷の体験が

(9) 大和岩雄2000『新邪馬台国論』大和書房。140～141頁および164～173頁。

混在する形で神武東征の伝説が生成する。更に久米部の伝承や吉野地域の地名説話やら服属伝承やらが散りばめられて伝説の細部が克明に語られる物語が生成する。こうして地名は実名であるが、登場人物は架空であるという神武東征の伝説が完成する。神倭磐余彦とは合成された人格の類型である。少数の部下のみを率いて現地では味方を集めながら、大軍に向かって戦いを挑む。そして奇跡の勝利を呼び覚ます。壬申の内乱に際して大海人の皇子こと後の天武帝が密かに吉野を脱出した日に日に味わった孤独で悲壮な境地を劇的に再現するドラマが神武東征の物語である。

3. なぜ天照大神は女神なのか。

なぜ天照大神は女神なのか。答えは簡単明瞭である。

天照大神のモデルとなった歴史上の人物が女王で

あったからである。女王は三人いた。三人とも卑弥呼という。

三人の卑弥呼がいた。初代の卑弥呼の墳墓は既に発掘されている。前原市に近い三雲遺跡のはずれにある平原一号墓に眠る人物は大型の銅鏡や耳飾りと(10)いった出土品から見て女人であろうと推計されるが、この女人はまず間違いなく伊都国に王女として生まれ倭国の女王となった人である。倭国の大乱があったと『魏志』「倭人伝」は伝えるが、倭国内で奴国が伊都国から奪われた指導権を取り戻そうとして仕掛けた戦闘である。だが、巫女王を担ぐ伊都国側が武人王を擁する奴国の軍勢を打ち破るという番狂わせが発生し、奴国軍は敗走し、奴国の王族は北部九州に別れを告げて東へ逃亡する。

この戦闘は神話の素材となり記紀神話では天照大神と須佐之男命との対決という形に結晶している。太陽神の託宣を受けて伊都国軍を勝利に導いた少女が初代の卑弥呼であろうと推計される。(11)

(10) 柳田康雄2000『伊都国を掘る』大和書房。および石井好「天照大神は卑弥呼である」全邪馬連第5回講演会。2018年10月27日。

(11) 平原一号墓から出土した大型の銅鏡の直径は46.5センチメートルであり、八咫の鏡と同形になると推算される。咫とは周尺の八寸の長さである。商尺で計ると一尺になる。半径が一尺の鏡の円周の長さは八咫となる。これはおよそその数字である。(円周率を3.2とした値である)。秦の宰相であった商鞅の定めた商鞅尺の一尺は約23.23センチメートルであるが、出土鏡の直径はその倍の二尺に当たる。半径で一尺であるから、円周の長さはおよそ六尺四寸となるし、円周の八分の一の長さは八寸となる。八寸を咫と呼べば円周の長さは八咫になるわけである。

八咫の鏡とは半径が一尺の鏡の別名である。尺の規準を定める器具である。

宮中に保管された八咫の鏡は火事で焼け出されたことが何度かある。『扶桑略記』に引く天曆日記には天徳四年九月廿三日夜に起きた内裏焼亡の記事が載っているが、焼け跡を調べた源重光の報告には「見瓦上在鏡一面。径八寸許」とある。鏡がほぼ無きずの状態で焼け残っていたというのである。ここで「径八寸」ばかりとあるが、円形の鏡の半径が八寸位であったという意味であろう。天平尺で八寸くらいと言えば24センチメートル弱になる。これが八咫の鏡である。『日本紀略』の記事を見ると御座・内裏・賢所の三カ所の焼け跡を調べたところ「一所鏡、件鏡雖在猛火上而不破損即云伊勢大神云々。一所鏡員形無破損長六寸許」御座と内裏に置かれていた二枚の鏡はほぼ無傷で焼け残っていたという。ここで「長六寸」と見えるが、鏡の身長とは直径のことである。

伊勢神宮の内宮のご神体は八咫の鏡であるが、商鞅尺の一尺が使われているとすれば平原一号墓から出土した大型銅鏡と同じ大きさの鏡になる。ひょっとするとご神体は平原一号墓から出土した大型銅鏡と同型鏡なのではあるまいか。ご神体は飯豊姫がはるばる前原から纏向に運んで来た宝器であり、ミマキ姫から豊鍬入姫を経て倭姫命に伝世され、ついに伊勢神宮に祭られた神器なのではあるまいか。古語拾遺には崇神天皇が「天照大神及草薙剣」を笠縫の邑に遷したと見えるが、ここで「天照大神」とあるのは八咫の鏡のことであると推察される。延暦二十三(804)年の皇大神宮儀式帳には八咫の鏡の容器は「径二尺、内一尺六寸三分」とある。これは天平尺であるから商鞅尺に基づく八咫の鏡なら十分に納まる大きさの容器である。

なお、『御鎮座伝記』には「八頭花崎八葉形也」とあるが、原田大六によれば、これは内行花文八葉鏡とおなじ意味の言葉である。同1966『実在した神話』学生社、164～165頁参照。尤も伊勢神宮の内宮も何度か火事で焼け出されているので、八咫の鏡は既に焼失して現存しないかもしれないし、あるいは破片だけが破鏡として残存しているのかもしれない。原田大六が伊勢神宮の宮司であった某からきいた話では、鏡箱の内部にはさらに円形の箱があるが、その内箱の径は二十三センチメートル内外で神衣に包まれているという。同1978『卑弥呼の鏡』六興出版、参照。

二代目の卑弥呼は有名である。魏志倭人伝に名を残し、「親魏倭王」として知られる二代目の卑弥呼の墳墓はしかしながら未だに発見されていない。二代目の卑弥呼もまた伊都国の王女である。幼くして倭国の女王に擁立されている。祭儀と外交に長け、魏の支援を巧みに取り付けたやり手の女流の政治家であった。銅鏡と布帛を好み、日の女神として倭国に君臨した。その墳墓が発見されないのは何故か。既に墳墓が存在しないからであろうと推定される。纏向への遷都の折りにおそらくは棺ごと運び出されて、三代目の卑弥呼の墳墓である箸墓古墳に合葬されたのではあるまいか。

三代目の卑弥呼の墳墓ははっきりしている。それは箸墓古墳である。三代目の卑弥呼の実名は飯豊姫である。台与とも壹與とも伝えられるこの女人は伊都国王であるフトニ王とその王妃であるクニアレ姫の女子に生まれ、十三才で二代目の卑弥呼に代わって倭国王になっている。後に父王と共に北部九州を去り纏向に遷都を実行した英傑である。太陽神の託宣を受け遷都を決断した美少女であったと想像力の翼を広げて置きたい。西暦の266年には西晋に外交使節を派遣している。西暦の285年に五十才で死去したと推計される。

なぜ天照大神は女神なのか。いまや答えは明白である。

天照大神のモデルとなった歴史上の人物が女王であったからである。女王は三人いた。三人とも卑弥呼という。更にのちの世になって日葉酢媛や氣長足姫や飯豊青尊といった摂政に当たる女后が出現しているし、また推古・皇極＝斉明・持統・元明・元正といった女帝たちが相次いで登極しているからである。

天上を統治するのは女神であり地上を統治するのは女帝である。日本とはこうしたお国柄の国なので

ある。

なぜ天照大神という女神が高天が原という天空の主宰神なのか。それは祀られる神よりも祀る神の方が上位に立つという律令国家の思想と現実に対応した序列の現れであるからである。タカミスビやカミムスビといった、産す日の神よりもそれを祀る巫女であるオオヒルメの方が貴い。偉大な呪術者である卑弥呼の方が祀られる太陽神である産す日の神よりも偉い。これが律令国家の現実であった。八百万の神々よりもスメラミコトの方が偉い。これが律令国家の根本であり国是である。

4. 明治維新の新機軸

明治二年の参拝は新規の試みであった。新たに歴史的な可能性が拓かれた。

天照大神は記紀に見える禁裏御所の伝承に拠れば女神である。が、伊勢神宮の秘説によれば、をがみつまり男神である。天照大神は両性具有の神であるかも知れない。両性具有という新しい解釈の地平が見える。陰陽合体神という見方に立てばすべては簡単である。⁽¹²⁾

度会延経の議論を見直して置く。天神と地神との二面性が分析される。

「我が国、日を比屢呼と称し、月を月読壯士と称す。此れ自然に合す。神祇令義解に云う。謂はく、天神は伊勢。是なり。古来、天照大神を地神の始めと称す。帝祖を以て天の日に配合し、天神と為し、地神と為す。二説共に相悖らず。日神を以て之を称する、則ち天神と為し、無形と為し、女神と為す。帝祖を以て之を称せば、則ち地祇と為し、有形と為し、男神と為す。」⁽¹³⁾

天照大神には二面性が備わる。二極性と言ってもいい。天空神である天照大神は女神である。だが地

(12) チベット密教の秘仏の如き如来とタキニ神との交合の神秘を垣間みていたのであったかどうかは定かではない。正面は女神であり裏面は阿修羅の如き若者の姿であるような神像を夢見ていたのかも知れない。

(13) 『内宮男体考証』内閣文庫本に拠る。

上神である天照大神は男神である。天空神と皇祖神という二面性を度会延経は鋭利に分析する。

天照大神の神性を論ずる記紀神学に転機が訪れていたことに間違いは無い。

文明開化の時代になると何もかもが議論と点検の火に晒される。万世一系と皇統二流の時代という室町中期に始まる皇統の新しい発展の形態を素直に見つめる機会が訪れていた。貞成親王の苦心は実を結び、禁裏家と並んで代々親王宣下を賜る伏見宮家が皇統の分流として伏見の地に居を構えるまでに至っていた。江戸時代には徳川家に威圧されながらも禁裏家という皇統の本流と親王家という皇統の分流は細々と京都と伏見の地に生き延びていた。

試みに天皇家かつての禁裏家を皇家と呼び、親王家つまり伏見の宮家を王家と呼ぶことにしよう。皇家の姫君と王家の若君が婚儀を通じて合体するというヴィジョンが開ける寸前にまで時代は向かっていた。

だがこういったヴィジョンが花開く日はなかなか訪れなかった。豊かな可能性が実現に向かう日は直ぐにはやって来なかった。それはなぜなのか。

4-1 橋本綱常と森林太郎の確執

こうした可能性が失われてしまった。何がこうした発展を阻んだのか。それは復古国学である。幕末に時代を押し進めた尊王攘夷の思想が近代的な国法学の殻を被って時代を錯誤した形で復活したのである。

『舞姫』という小説がある。森林太郎の作品である。大田豊太郎という帝大法科出身のエリート卒業生が官吏として留学生に抜擢されて独逸に渡って体験した不可思議な運命の物語である。まるで浦島太郎のように乙姫様との何一つ不満のない生活が突然

崩れてしまう不運と不幸の物語である。物語は回想から始まる。懺悔と後悔が主題の小説である。恋人を喪失するという心の内部の悲愴な体験が近代的な自我を創造する。親や家といった自分を育ててくれた伝統の世界との決別を促す。家や世間の評判や栄達を求めると何が起こるのか。祟りである。実は自分に取って何よりも大事な存在を失ってしまう。しかも失うまでそれほど大切な存在であると気づいていなかったことも明らかになる。喪失の体験が自我を育てる。恋人との恋愛は自我の一部であり恋人の喪失は自我そのものの喪失の体験であるからである。

森林太郎はやや早熟な少年であった。西周がその才能を見抜き、英才教育を施した。森林太郎の才能はすくすくと伸び育ち、そして東京大学医学部の首席の座を狙う位置にいた。首席になる。その筈であった。だが出来すぎてしまったのである。ドイツ人教官団に妬まれ呪まれ、卒業試験の成績は振るわず八番に終わった。一番か二番であれば西洋留学が約束され、医学部の教授という輝かしい将来が約束されるという状況であった。森林太郎が直面した人生第一の壁がそこに聳えていた。外国人教授団から生意気な東洋青年として侮蔑の眼差しで見られ蔑まれ疎まれてしまったのである。

行き場のない暗い日々を送るのを見かねてか救いの手が差し伸べられた。西周が友人であり軍医総監であった林研海に働きかけ、陸軍省で軍医として採用して貰い、陸軍省からドイツに留学する機会をお膳立てしてくれたのである。⁽¹⁴⁾

古参の軍医たちは大喜びであった。跳びっきりの秀才が軍医になるという話である。森林太郎は古参の軍医たちに将来の軍医界を背負って立つ若きプリンスの如くに歓迎され受け入れられた。

(14) 西周が林研海からの書簡に朱筆で「愈御安全奉賀候、陳者林太郎君之件如此候間御安心御有之度存候也」と加筆している。全集本では明治二十三年の書簡と推定するが、これは当時軍医総監であった林研海が西周に宛てた森林太郎の就職の件は順当に進んでいることを伝える明治十四年の書簡に付された同年中の添え書きである。添え書きの背景については中井義幸1996「軍医森鷗外再考」『鷗外』59号及び同1999『鷗外留学始末』岩波書店、125～132頁参照。

だが不運が襲った。林研海が旅先のパリで急死してしまったのである。軍医総監の急死は森林太郎に庇護者を失うという痛手を与えた。更に困難が重なる。

つい一月ほど前に順天堂を主宰する佐藤尚中が急死し、跡継ぎの佐藤進がにわかに陸軍省を退職する羽目に至ったのである。佐藤進が軍医総監の後任になる。大方の予想を裏切って橋本綱常が東大から呼び戻されることとなる。将来の軍医総監になるためにである。橋本綱常は事務能力に不足があるので軍医総監には不向きとして東大に追いやられていたのであるが、ここで形勢が逆転する。

橋本綱常は森林太郎の仇敵であった。橋本綱常は無類の努力家で腕のいい外科医であったが、ドイツ学の先達として世に名をなすという野心と自負を抱いていた。そんな橋本綱常から見ると森林太郎は遥かに若くて自分よりもドイツ学の学力も勝っている将来の自分の地位を脅かす宿敵ともいべき存在であった。森林太郎が留学の機会を与えられるかどうかを左右する寸前の処にまで橋本綱常の力が及び始めていた。軍医制度の確立という西周が森林太郎に任せたかった任務を鳶が油揚をさらうかの様に橋本綱常が横取りしてしまう。

森林太郎も必死であった。橋本綱常のヨーロッパ行きが内定した明治十六年の三月に森林太郎は橋本綱常に直訴を試み、朝から橋本宅に馳せ参じたが、出勤直前の橋本綱常は森林太郎を客間に残したまま外出してしまう。自分を随行員の一人に加えて欲しいという願いを直接伝えるという目論みは全く無視され、森林太郎は一日中客間で橋本綱常の帰りを待ち続けることとなる。昼飯を出され黙々と食べていたという。橋本綱常が帰宅したのは夜七時ころであった。十数時間も待ち続けていたという。生涯⁽¹⁵⁾

忘れる事のできない屈辱の日であった。

4-2 ドイツ留学の日々

森林太郎の苦境を救ったのは石黒忠恵である。橋本綱常の復帰により石黒忠恵もまた窮地に追い込まれていた。石黒忠恵は軍医としていつも橋本綱常の後塵を拝して来た。二人は同じ弘化二年の生まれである。明治四年に石黒が八等出仕で軍医寮に入ると橋本が七等出仕で入って来た。翌年には橋本は選ばれてドイツ留学を果たしている。石黒は国内で雑務に奔走している。明治十年に西南戦争が勃発して石黒が一等軍医正として出征すると、橋本が急遽ドイツから呼び戻され軍医監に任じられて上司として戦地にやってきた。橋本綱常は石黒忠恵にとって目の上のたんこぶであった。

その後、橋本は外科の腕は素晴らしいものの事務能力が足りないと思われ、主流から外されて一旦は大学に出されたが、その間に石黒は軍医本部の次長に抜擢された。今度こそ橋本を出し抜くことができた。と石黒は思った。だがあろうことか、軍医総監であった林研海がパリで客死し、佐藤進までも陸軍を去る。こうして橋本綱常が軍医総監の有力候補として陸軍本省に戻る運びとなった。このままでは陸軍省を追放されかねない。

石黒忠恵は今や失意のプリンスとなった森林太郎に救いの手を差し伸べて、自ら窮地からの脱出を企てる。橋本綱常の目を盗んで、森林太郎を留学させる。これが石黒が打った秘手であった。松本順が暫定の軍医総監の座にある間に橋本には気付かれない様に目くらましをかけて、森林太郎にドイツへの留学の機会を確保する。

森林太郎が留学先のドイツで華々しい業績を積み、自分の手柄にもなる。いわば二人三脚の形で危

(15) 奥野信太郎「鷗外先生と祖父」岩波版鷗外全集月報26号。自紀材料には明治一六年三月に「二十六日。橋本綱常氏を訪ひて欧州に随行せんと乞ふ。聴かれず」と見える。小堀桂一郎は鷗外の橋本綱常宅訪問を明治十七年の出来事とするが、これは明治十六年のことである。この嘆願が受け入れられなかったので、同年六月に軍医を一名独逸に派遣する計画を石黒忠恵あたりを焚き付けてその差し金で開始する訳である。小堀桂一郎1969『若き日の森鷗外』東京大学出版会。14～15頁参照。

機からの脱出を試みた訳である。石黒の賭けは当たった。石黒が望んだ脚気菌の発見には至らなかったものの、国際赤十字への参加が正式に認められた。輝かしい外交の成果が挙げた。これで橋本につづきの軍医総監になれる。橋本綱常が外遊中に森林太郎を送り出す。巧みな作戦であった。

森林太郎は明治十七年の秋に船でドイツに向かった。『航西日記』という漢文の日記が残っている。「赴德国修衛生学兼詢陸軍医事」これが辞令の命じる職務の内容である。八月二十四日に横浜を発ちマルセユとパリを経て十月十一日にベルリンに到着している。ベルリンでは外遊中の橋本綱常や大山巖に面会している。十月二十二日にベルリンを発ちライプチヒに向かった。

森林太郎には軍医監ロートからも助け舟が出された。ロートはザクセン軍の軍医監であったが、松本順とも橋本綱常とも面識がある親日家の軍人であった。⁽¹⁶⁾

二人から二通の推薦状がロートの元に届いた。明治十八年の十月十四日に「徳停府」ドレスデンの酒店で森林太郎はロートと酒を酌み交わした。席上ロートから相談を受けた。松本順と橋本綱常から二通の書簡が届いたが不審があるという。松本からの書簡は書記の手になり松本が署名している正式の書簡である。これに対して橋本からの書簡はベルリン訛りがひどいものでベルリン育ちでないと書けそうにない。橋本の自筆とは思えない。また橋本は只の軍医監なのに軍医総監である松本の命令を勝手に変更している。「是れ奇中の奇なり」。疑いは尤もである。ただ一々松本に問い合わせる変更すべきではあるが、日時がかかるので省いているのだろう。それに松本は橋本が帰るまでの臨時の勤務であるから橋本は既に軍医総監になった気分なのだろう。ああそうなのか。ロートは答えた。「陸軍卿の随行は定め

て人の羨む所なるべし」と。

こうしてロートはなお松本順が軍医総監の職にあり、橋本綱常の上司であることを確認した上で、松本順から森林太郎に宛てた命令の方に従い、橋本から来た命令の変更を無視することと決したことが分かる。「詢陸軍医事」という留学目的に沿ってドレスデンにおける軍営の訓練に森林太郎を招待するという方針がこうしてロートによって用意される運びとなった。

ロートの協力は強力であった。森林太郎は日本大使館からの正式の通知を待たずにドレスデンに赴いている。ロートが日本大使の許可が出たことを確認して至急の呼び出しを森林太郎に送る様にザクセンの当局に働きかけた結果であろうと推察される。⁽¹⁷⁾

こうしてロートの協力を得て森林太郎は橋本綱常の言いなりにならずドイツにおける留学の機会を存分に生かす幸運に恵まれることになった。だが幸運がいささか強すぎた嫌いがある。エリーゼ・ヴィーゲルトとの運命のめぐり合いが生じてしまったのである。⁽¹⁸⁾

4-3 エリーゼとの出会い

森林太郎がエリーゼ・ヴィーゲルトとどのようにして知り合いになったのか。その詳しいいきさつはなお不明であるが、鷗外のベルリンでの二度目の下宿の裏に当るビルの管理人の家族の娘であったことはほぼ確実である。まだ未成年であったから、家事の見習いをしていたものと推量される。鷗外はエリーゼにドイツ語の会話の相手をして貰ったにちがいない。国際会議で活躍する布石である。どうせ会話の練習をするのなら小柄で可愛らしい金髪の美人の方がいいといった魂胆も混じっていたことであろう。それにエリーゼの死んだ父親はもと軍人であったからプロイセン軍の兵士やその家族の様子を色々

(16) 武智秀夫『軍医森鷗外のドイツ留学』思文閣出版、特に第5章の四と第8章の三を参照されたい。

(17) 中井義幸は森林太郎が独逸大使であった青木周蔵の許可を得ずにドレスデンでの野戦訓練に参加したのではないかという疑いを投げているが、大使館からの通知の到着が遅れただけであって、許可が出ていることを聞いてから出向いたと推算される。同「軍医森鷗外再考」(『鷗外』59号)219~222頁。

(18) 蓮沼啓介2016「大日本帝国憲法と森鷗外」本誌前々号。

聞き出せるといった思惑も働いたことであろう。

ともあれ二人はすっかり気が合った模様で、やがて二人の仲は急速に親密になったと推察される。そのエリーゼが日本にまでやって来るという騒ぎが生じた。二人は本気で結婚する積もりであった。

だが第二の壁が立ち上がった。森家の女たちである。母峰子や祖母清子が異国の女を森家の嫁にすることに猛烈に反対したのである。反対は強烈でありエリーゼと結婚したいという林太郎の願いは空しく消えた。更に追い打ちがかかった。西周が持ち込んだ赤松登志子との縁談を受ける様に母親に強く迫られてしまったのである。縁談を断れない心境に林太郎は追い込まれて行く。

森家では女たちが決定を下す。天空を支配するのは女神であるし、地上を支配するのは女帝である日本という国では、家を支配するのは女たちである。

結婚と婚約は両立する。これが鷗外の当面の到達点であった。赤松登志子と結婚してもエリーゼとの婚約の状態はそのまま続く。健全な懷疑の立場を果敢にも実生活に持ち込み実行する。思想家としての森鷗外の一面向き輝いている。

橋本綱常との闘争は続く。鷗外の最大の味方はクラウゼヴィッツであった。

初婚の破綻の危機に直面して、森林太郎は石黒忠恵が軍医総監に就任する瞬間を狙って電光石火の引越しに出る。ロートから学んだ早業である。

だが赤松貞には勝てない。その強引さは奥医師の父親譲りであった。諦念という言葉が耳に響く日々を迎える。自信を喪失した鷗外に代わって離婚を決断したのも西周であった。西周は極め付きのウルト

ラ付きのリアリストであった。

4-4 復古国学の成立

橋本綱常と大山巖の関係が一切の鍵を握っていた。大山巖は橋本綱常の外科医としての腕前に全幅の信頼を置き、そのドイツ学にも敬意を払った。これが巨大な帰結を招く。西南戦争の戦場で始まる二人の出会いが運命的であった。プロイセン軍の優秀さに大山巖は惚れ込んでいた。この軍制に習って日本陸軍を建軍する。橋本綱常が知識の出所となった。橋本はプロイセン軍の編成を外面において認識していた。プロイセン軍はフリードリッヒ大王の時代に確立した近世常備軍の編成を外形ではそのまま保持していた。軍紀や軍律や軍人精神は憲法政治の時代に沿って変容発展していたのであるが、こうした兵士の内面の変化には橋本の観察は届いていなかった。森林太郎のように兵士の家族と交際したり軍医として実際に勤務したりしないとプロイセン兵士やその家族の心の内側まではなかなか見えてこないからである。

こうして日本陸軍は絶対王制の時代に引き戻されることとなる。軍の統領である大王の位置には名門の祭主であった天皇が置かれ、幕末政局において時代を先導した尊王攘夷の思想と精神が、時代を錯誤した形で、兵士の心の中に吹き込まれることとなる。歴史的な反動として復古国学が編み出される。⁽¹⁹⁾ 信仰の強制が開始される。記紀の神話や伝説は神典として一切の疑いを受け付けけない強固な真実となる。万世一系が憲法典に彫刻される。万事天皇陛下万歳の世の中になる。⁽²⁰⁾

(19) 蓮沼啓介2005「復古国学の批判」神戸法学雑誌55巻2号参照。

(20) 伴信友が「神璽三弁」において日本後紀桓武の巻に「以璽并劍櫃奉東宮」とあるのを、璽は鏡剣を示し、劍櫃は「大刀契」であると解したことが始まりである。実際には璽は天皇御璽を示し、剣は草薙の剣を示し、櫃が「大刀契」を示す箇所である。こうした誤読の結果として「天子神璽宝剣符節鈴印等」という文徳天皇や清和天皇の踐祚の儀式に登場する「天子神璽」を勾玉と誤解することとなった。実際には「天子神璽」は文字通りに天子の神璽であり言い換えれば天子の御印である。天皇御璽である。「宝剣」は草薙の剣であるし、「符節鈴印等」が「大刀契」である。八咫の鏡は御在所に置いたまま、踐祚の儀式の場に運び出したりはしない。これが桓武天皇が始めた新しい儀式であった。古色蒼然とした八咫の鏡は皇帝の即位儀式には似合わないからである。儀式讓国条に「内侍持璽劍追従」云々とあるが、御璽と宝剣を持ってという意味である。

橋本綱常と森林太郎は歴史的な宿敵となった。橋本綱常の設計した陸軍の編成に沿う形で、憲法の構想が練り上げられた。欽定憲法とは天皇を憲法典の上位に位置づける法の段階設計である。天皇—憲法—法律=勅令—政令—省令—府県規則=条例と法文の序列が設定される。こうした序列に沿って憲法草案が井上毅の手によって起草される。公定の解釈として憲法義解と皇室典範義解が編集される。近代憲法典の真ん中に立憲主義を否定する天皇条項が盛り込まれる。大日本帝国憲法の発布である。

天皇に対する忠誠心を信仰の領域に設定して、一切の信教の自由の上位に立つ極限的な信仰として臣民にその信仰を強制する。これが復古国学である。大日本帝国憲法の告文や勅語や天皇条項は疑いを差し挟むことを決して許さない絶対の真理として人々の前に君臨し人々を威圧し服従を強要する。単に人々の外面の行動を規制するだけの法文に止まるものではない。それは永遠の真理の歴史的な顕現として全ての価値に優越する絶対的な価値規範であった。

これが、森林太郎が一生をかけて戦った真の敵である。その人生に立ちはだかった第三の壁である。天皇に対する信仰強制の凄まじさは「かのように」に示されている。次第に五条秀麿の意識の内部に広がる結晶は信仰強制に圧迫されて発生する思考停止の症状そのものである。

明治維新とともに一時的に発生した豊かな歴史的な可能性を阻んだもの、それは復古国学であり、その落とし子であった大日本帝国憲法のものである。

5. 残された歴史的な可能性。

ポツダム宣言の受諾により、1889年憲法に構造変動が発生する。天皇条項が効力を喪失して、1945年憲法に席を譲る。天皇が主権者として天皇条項を破棄したのである。⁽²¹⁾ 欽定憲法とは天皇を主権者とする憲法である。

天皇はまず自らを憲法を制定する権能を有する憲法制定権力として登場し、天皇主権を定める根本規範を定立する。この天皇主権という根本規範に基づき憲法典が欽定される。天皇はこうした憲法を制定する権力を有していたのであり、それ故憲法を自ら廃止する権能をも持ち続けていた訳である。ポツダム宣言の受諾に先立ってその受諾に必要な条件を調える為に、天皇は自ら有する憲法廃止の権力を行使し、天皇主権という根本規範を廃絶する決断を下した訳である。

この場合に1889年憲法の内部に不整合が存在することが大きな意義をもつこととなった。大日本帝国憲法においては天皇条項とそれ以外の条項の間に不整合が存在する。天皇条項が近代的な立憲主義に対するあからさまな例外規定であったのとは対照的に、臣民の権利義務や統治機構を定めるそれ以外の条項は近代的な立憲主義に基づく規定からなる別の部分であって、軍部憲法案として知られる西周や山田顕義や山県有朋らの私擬憲法案と基調を同じくする⁽²²⁾ 穏健保守の立場に立つ憲法条項であった。

天皇主権という根本規範が廃棄された効果としてそれに直接基づく天皇条項が失効したが、なお効力を失う事無く残存した部分が1945年憲法となる。天皇はポツダム宣言の受諾により主権者であることを止め立憲君主に生まれ変わったわけである。

つづいて1945年憲法の改正条項を用いて憲法典の

(21) 蓮沼啓介1984「八月政変と十月革命——日本国憲法誕生の法理」神戸法学雑誌34巻2号。

(22) 西周の私擬憲法案については『西周全集』第二巻「解説」及び蓮沼啓介2009「明治十四年の政変と西周」神戸法学雑誌58巻4号参照。山田顕義の私擬憲法案については稲田正次1965『明治憲法成立史の研究』参照。山県有朋の私擬憲法案については蓮沼啓介2008「山県有朋の私擬憲法案」神戸法学雑誌58巻1号を参照されたい。

全面的な改正が実行された。1947年憲法の成立である。こうして国民主権の原則が確立する。

ようやく復古国学に決別する日が近づいて来る。復古国学が成立した事情がこれまで不明であった。だが森林太郎と橋本綱常との確執が再び人目に触れることとなり復古国学の生成した事情が明るみに出る。何ぞ明治維新とそれに続く文明開化という市民革命ともいうべき歴史変動の時代の後に、まるで絶対王制を彷彿させる明治国家が出現するのか。こうした逆流とも見える歴史の謎が漸く解き放たれる。文明開化という名の文化革命に対する歴史的な反動として復古国学が生成する有様があからさまに浮かび上がって来る。くっきりとその姿を現す。

時代錯誤の復古国学とその残滓や残党が根こそぎ引き抜かれる時がついに来た。記紀の伝える神話や伝説は物語であってそのまま歴史の事実であるわけではない。皇統は中世に二つに分流した。これが史実である。明治国家は絶対王制ではなくて市民革命に対する歴史的な反動の産物である。明治国家を絶対王制と断定する講座派歴史学はそれ自身が復古国学の一変種である。思想界の封建遺制そのものである。

試みに再び天皇家かつての禁裏家を皇家と呼び、親王家つまり伏見宮家を王家と呼ぶことにしよう。皇家の姫君と王家の若君の神婚により王家を新たに立憲君主として復活させる道が拓かれる。皇統の本流である皇家は京都方面に遷って禁裏御所を再建するという扉が同時に開かれる。

万世一系かつ皇統二流の時代が到来している。本流と分流をどちらも生かす。そして皇統の弥栄を願ひ念じる。

時は今 天が下知る 五月かな。

